

私たちはどこへ向かうのか？そして私は・・・？

—3・11からのひとつの家族のゆくえ—

西村 智与 (にしむら ともよ)

今、私にはいくつかの抱えている問題があります。

1、原子力発電をめぐる諸所の問題に、自分がどう関わっていくべきかという問題。

2、放射能をはじめとするさまざまな複合汚染のなかでいかにして子どもを育てるか、という問題。

3、困難な状況のなかで家族と助け合うこととそれぞれの自立という問題。

4、夫と私の関係性の問題。

5、親との間にある精神的葛藤の問題。

これらの問題は、3・11以前から私の中に蓄積されてきていたのだが、私は、時々それらを思い出しちょっとしたやり取りによってぐりぬけ、真正面から向き合ってはこなかった。向き合わなくても日々は過ぎ、その時々楽しいことなどもあったわけで、できれば日々を毎日同じように、ちょっとした楽しみを見つけて過ごしていきたくかった。

しかし、3・11により、私のちょっとした楽しみが一瞬で奪い去られるような事態が起こりえること、人智でどうにもできないことがあるということを思い知らされたと同時に、人と人のつながりによって、それらの事態を乗り越えることができるかもしれないということに、深く心が揺さぶられる日々が続いた。

そのようななかで、思いを共有できる人々との、思いがけない出会いがたくさんあった。わたしは、この人々と繋がっていきたい、この思いのなかで生きていきたいのだと、強く思うようになった。そうして、時間を次につないでいくことができると思えるようになった。

このように建設的な気持ちを持ち始めた私でしたが、またもや思いがけない出来事によって、再び、深く、深く揺さぶられ、普通に立ってはいられないようになってしまいました。なぜ、私はこんなにもダメージを受けてしまったのか。そのことを思い続ける日々です。しかし、すこしずつはいあがれるようなイメージも湧き上がってきました。

そして、なんとなくつかめてきたのが上記の1～5なのです。1～5は決して独立した問題ではなく、複雑に絡み合っていて、私の中に出入りしています。そのため、私はとても混乱して、自分が今、どのような問題に苦しんでいるのかが全く分からなくなり、人に話そうにも、何をどのように話し始めたらよいのか分からなくて。問題群は私のなかから出口を求めてさまよい暴れています。出口を求めて、書いてみたいと思います。

5月。ゴールデンウィークに、私と夫、私たちの子どもが二人、そして私の両親と妹の、計7人で旅行に行った。1日目は若狭の宿だった。温泉につかり、刺身を食べて、和やかにわいわいと過ごした。

食事の後、部屋に戻り明日の予定などを話していたが、どういところからか、話が放射能の話題へと移った。私の妹は東京の北区に住んでいるのだが、仕事を辞めて京都に移ることを考えている。原発事故以来、関東地域での汚染状況をさまざまなブログなどで知り、実際自身の体調も悪く、そうした中でいろいろ考えた結論だった。しかし、夫は、ほとんどの人が普通に住んでいる、汚染についての根拠があるのか、自分で調べたのか、と聞く耳を持たない。私は、普段からの夫との会話で、

散々そのようなやりとりをしているのでせっかくなゆくりしに来たのにしんどいな、と思い、話にあまりかかわらないようにしていたつもりだった。それでも、ずいぶん長い時間そのやり取りは結局続いていた。いつも同じ、自分の意見をとにかく主張しあうだけのやりとりが。

同じ部屋にいた父は、ひたすらテレビを見ていた。テレビのボリュームが大きくて、私はうるさいな、と思っていたが、向こうも私たちの話をそう思っていたとは気づかなかった。母は、「もうそういう話は分からないので、二人でやって。」と言って、場を離れた。

そのようにしてその日の夜を過ごし、次の日を迎えた。若狭から岐阜へ移動し夜になって、知り合いが借りている古民家のようなところへ着いた。そこで事件は起きた。

囲炉裏のようなところがあり、そこで魚などを焼いて食べていた。移動での疲れもあったが、子どもたちは元気にはしゃぎ、それなりにゆくりと過ごして明日を楽しもうという気分であった。父は、お酒を飲みながらひとり漫画雑誌を読んでいた。食べながら昨日の話をした。

昨日、私たちは大声で話し、子どもが走り回り、そしてテレビのボリュームは大きかった。その日、その宿では私たちのほかに泊り客がないと思っていた。とにかく私たちはうるさく過ごしていた。子どもが走ろうとしてつまづき、転んで壁に頭をぶつけた。「コン！」

次の瞬間「ドンツ！！」。向こう側から、壁を激しく叩き返された。壁にかかっていた吊り鏡が大きく揺れた。「え??」と聞いていたら、もう一度。そしてもう一度。「ドーン！」、「ドーン！！」。隣に人がいたんだ。

私たちはあわてて、心の中でごめんなさいと言って、しかし、その壁の衝撃はそのまま私たちの心に衝撃を与えて、後は沈黙。父と母と妹をその部屋に残し、私たちは自分たちの部屋に引き上げた。今思えば、あれは、本当に隣の宿泊客がしたのだろうか？とすら思える。まさに、あの壁を打ち震えさす衝撃、その恐怖、自分にも非はあるけれどもそれ以上に得体の知れない正体不明の恐怖。あの衝撃はすべてを象徴し、またすべの始まりを予告していたとも思える。

ともかく、それから丸一日が過ぎた夜である。そのことに話が及んだ。子どもがうるさかったと言う私。いや、あれくらい民宿では当たり前で、壁を叩いた人がどうかしている、と言う夫。テレビの音も大きかったよね、でも、やっぱり、と、私たちがあれこれ言っていたところへ。父が、

「お前たちの話が一番うるさかったんだよ！」と。聞くに堪えなかった、けんかするならふたりでしろ、あのように声を荒げて話をするならもう自分と一緒にいたくない、と。

私は確かにその通りだな、と思った。そうなのだ。私と夫が話しをすると、本人たちにはそのつもりはないが、回りからは「喧嘩」ととられる。そのくらいの激しさがあるのか、不快さがあるのか、よく、よそでやれ、とは言われていた。だから、父の言うことにも理解ができた。確かにそうだし、しかも、私もあのような話の仕方は望んでいない。だから、そうならないようこれから気をつけなければ、と、心の中で思った。

その後だ。だんだんと父の顔色が変わってきた。正確に言えば、目の色。なんともいえない、光ったような目。つり上がっている。「あれ？」と私は思った。話はこれで終わりじゃないの？もう納得してるけど？と。

「俺の娘をお前呼ばわりしやがって、、、！」と、父が口を開いた。

「お前お前、って、親の前でよくも言い続けたな！俺が大事に育ててきた娘なんだよ。俺の。俺の娘なんだ！」

「娘を幸せにすると行って結婚したのじゃなかったのか？娘は幸せか？幸せに見えるか？どうなんだ？」

父のいつている言葉は、はじめ、素直に嬉しかった。私のことを思ってくれているんだと感じられた。そして、言っていることも間違っはいなかった。私と夫は、いつも主張をしあうだけお互いを受け入れようとしな。

昨年原発事故以降、私は、原発と放射能の問題、世の中のあり方、私たちの意識のあり方、子どもを育てることなどについて、今までにはなかったような恐れや不安、そして責任を感じていた。しかし、どうにかして、このことは考え続けていかなければという風にも思っていた。これらのことを考えることは、私にとって、とてもはっきりとした芯を築かせることとなった。エネルギーのこと、社会のあり方について、今まで頭で考えてきたことが、はっきりと実感を伴って「その様なあり方は嫌だ」と分かった。環境を奪われることは嫌だ。二度と戻れない、住めなくなるようにしてしまうことは嫌だ。子どもを外で遊ばせることができない、土を触らせることができないのは嫌だ、、、たくさんの嫌だと思うことが出てきて、ではそうではないようにしたいという思いもはっきりとした。

しかし、そここのところで夫とは、考えを共有することができなかった。もしかしたら「感じ方」としては共有していたのかもしれない。「嫌だ」という思いの部分では。しかし、だからこうしよう、こうしたいという未来に向けての考えを共に築くことはできなかった。彼はそのように考えることで現状を維持できなくなることを恐れていた。もし、原発がなくなったら？エネルギーの不足分のしわ寄せが来て石油やほかの燃料価格が高くなる。そうなったら車や重機を使う自分の仕事も難しくなる。生活ができない。というように。

再び父が言う。「娘が信念もってやってるんだよ。なぜそれを理解しない？理解しないで幸せでいられるのか！」

確かに。お父さん、私もそう思います。どんなに多くの思いを共有できる仲間ができて、一番近くにいる、一番大切な人に、私は思いを届けることができない。対話できない。共有できない。その状況にいつも心苦しいものを感じていました。

でも私は、この事実を目をつぶってやり過ごそうとしてきた。それは、今ここにある日常を壊したくなかったから。思いが通じ合わなくても、毎日過ごすことはできる。ご飯を作りご飯食べ、学校に行き、仕事に行く。「宿題したの？誰と遊んだの？」「もう寝る時間だよ」具体的な物理的なやり取りだけでも十分時間は過ぎ、日々の決まりきったことをしていればそれでよかった。私の内面がどうであれ、それを表に出す必要はなかった。必要はないのだと思いたかった。

しかし、私の心の葛藤を父は見透かしたのであろうか？夫に問いかけ続けた。話は父から夫への一方通行。夫はほとんど

黙っている。時々小さな声で「はい、、そうだと思ひます。」父の語りは、だんだんと聞き苦しいものになっていく。夫への批難、罵倒。合間に私に対する良く分からない感情の吐露。「あいつは俺が育てた、俺の娘、お、れ、の！俺のもの！」

お父さん、わたし、あなたのものじゃないです。

そこまで激しく父が夫を批難する行為の背景には、本当に私のためを思う気持ちだけだったのだろうか？本当のところ、きっとそれは父にも分からないだろう。しかし、私は、どんな気持ちだったか。辛かった。辛くて、悲しくて、そして怖かった。なぜ怒鳴るの？なぜ当事者である私には話しをさせないの？なぜ、ほかの人はどう思うか聞かないの？なぜみんなが泣いておびえているのに、話を止めないの？そして、、なぜ？どうしてビール瓶を叩き割ったの？割れたビール瓶を夫の顔に突きつけて、それをどうするつもりだったの？

止めに入った母の顔に、何かボトルのようなものを投げつけた。「男と男が話してるんだ！入ってくるな！」と。父が2本目の瓶を割る音がした。私は気がどうにかなりそうだった。止めさせなければ、止めさせないと、でも、どうやって？刺されちゃうかもしれない、武器、、だめだ持ったら私もやってしまう、と。私の夫であり、私の父であるのに。悲しい気持ちが大きくなりすぎて、私は叫ぶことになった。叫んで、叫んで、叫んだ。二人が部屋から出てきて、父は「帰る」と一言。そして、岐阜の山の奥から私の両親と妹は出て行った。父が出て行く間際、私に「一緒に帰るぞ」と言ってきたので、私は再び叫んだ。叫び続けた。夫が、「子どもが怖がるから」と言いに来た。

そうだ。子ども。子どもたちの名前を呼ぶと、下の子どもはすぐに寄ってきた。ニコニコしている。大丈夫。もう一人は？上の子どもの名前を呼び続けた。部屋の隅のたんすの陰に隠れてうずくまっている。駆け寄ると、声を上げて泣き始めた。おびえて震えている。「怖かったね、ごめんね」と言うことしかできない。それからしばらく泣き続け、子どもと3人抱き合いながら、泣いたまま、眠りに落ちた。

これが、気持ちの良い風の吹く5月の連休に、桃源郷のようなすばらしい景色の山の谷間の里で起きた、私の家族のある夜です。あの日以来、粉々になったビール瓶のように、私の心も砕け散ってしまったようです。あのガラスの破片が、どうやっても元には戻らないように、私の父への信頼、そして夫への愛情も、バラバラになってしまいました。

どうしてこんなことになってしまったのか。どうして私たちは、静かに話ができなかったのか？互いの思いを素直に出し合い、そしてやさしく受け取ることができなかったのか？夫なのに、親なのに、家族なのに、、、？

夫であり親であり、家族だから？近くにいるから一緒だと思い込んでいたのだろうか？育てられたし、育てているし、一緒にいるから？だから同じように思うはずだし、同じように考えるはず。同じ、同じ、、、？

私たちはどこへ向かうのでしょうか？

(千晶) 西村さん、読んでいて、どうしてだか、楽しい気持ちになりました。実際、笑ってしまったくらい。というのは、これと同じようなことが、20年前、わたしの身にも起こったから。西村さんのGWは、良いことの始まりのようにわたしには感じられます。